



# 大事な人間についての知恵

東京大学第22代学長 平野龍一氏



この四月、東京大学第二十二代学長に就任された平野龍一先生を、学長応接室に訪ねた。

専門は刑法、刑事訴訟法で、当事者主義の考えを取り入れた新しい刑事訴訟理論と機能的な刑法理論とを体系化され、法曹界の理論的リーダーの一人として知られる。

法制審議会刑事法部会委員、監獄法改正部会委員など歴任され、この間刑法改正草案の作成にも参加されたが、保安処分新設をはじめ刑法改正草案に対して、全面的に批判的立場をとられた。

三年の軍隊経験があり、このとき得た生の人間への理解が、その後の研究時の物事の判断に大きな影響を与えたと言われる。

大正九年熊本市坪井生まれ、父龍起氏（故人）は元熊本市長、母松江さん（八四）は元藤崎台童園長。旧制熊中、五高を経て昭和十七年東大法学部卒。

著書に「刑法総論」「刑事訴訟法」「矯正保護法」等がある。  
現住所、東京都世田谷区上北沢三二〇二一。

## 職責を全うする

四月、学長に就任したのですが、選任されたときの記者会見で、「抱負を」と言うことだったんですよ。まあ、東大の学長は気のきいたことを言わなきゃいけないんですけど、そういうことをあまり言わなかったんで、あんまり評判がよくないんですよ。（笑い）

言うだろうと期待されると、かえってそんなこと言うものかという気になるんですね。肥後モッコスなんです。もともと熊本の人はあまりかっこいいことを言いたがりませんしね。

まあ、いろんな問題がありますが、今

後の日本及び世界の大学での研究及び教育の中で、東京大学がどういう役割をしたらいいのかということ自体が大変な問題ですので、そういう点をよく考えて、与えられた仕事を一生懸命にやっているとと思っています。

## 坪井出身

ふるさとの思い出、というとかか遠い昔のことのようですがね。熊本には今でも時々帰っていますし、家族も熊本に住んでいますので、子供の頃の思い出ということですね。子供の頃は、坪井川が家（内坪井）の裏を流れていましたね。き

うのはあまりないと思うんです。その点、私はそういう機会があって、ごく小さい頃から、大人の社会に対して目を向ける機会が与えられていたわけですね。

また、父のことと言えば職業は弁護士だったんですが、終戦直前に熊本市長をやりました。毎日、晩酌をやっていたね、この晩酌のところでいろんな話をよく聞かされていたんですが、酔っぱらって政治の話をしたり、いろんなことを言っていましたね、大人の世界とはいろいろ大変なんだなあと子供心に思ったものですよ。（笑い）

## 西鉄監督

熊中、五高の初め頃も運動ばかりやってましてですね、勉強はあまりしなかったですよ。五高二年の頃体をこわしましたから、野球をやめて勉強を始めたんですが、もしその時体をこわさずに野球をつづけていたら、あるいはその、よく言っているのですが西鉄の監督ぐらいにはなっていたかもしれないと、職業の選択を誤った。（笑い）

戦前でしたから課外の運動がうるさくなり、特に野球はアメリカのスポーツなんでありやるとかいうふんい気が出はじめていましたね。だから、小学校の頃から先生はあまり面倒を見てくれなかったのです。ほとんど自分たちだけで練習をしていました。試合のときだけ先生が出てくるというような状態でした。だ

れいな川ではありませんでした。土手があったて風情がありました。しかし、雨が降るたびに洪水を起していました。今は、市役所の前から川幅が広がってありますが、殺伐とした感じになってしまいましたね。

父が鹿本の来民で、母が菊池の隈府の出身ですので、夏休みにはよく隈府に行ったり、来民に行ったりしていました。幼稚園の頃だったと思いますが、母が何ヶ月か病気で休んだときは、祖父の所に預けられて隈府で暮らしたのを覚えてます。ですから田舎の生活、あるいは田園生活を楽しみました。

小学校は男子師範の附属小学校でした。体が弱かったし、姉と妹にはさまれて育ったので、父は男らしい子供に育てようと思ったのでしょうか。近くに女子師範の附属がありました。京町の男子師範の附属に入れられ、毎日歩いて通いました。学校でも運動ばかりやっていたね。野球や剣道もやりましたし、学童オリンピックというのがあって三段飛びと四百メートルリレーにも出ましたよ。ただ大変不器用だったので運動会でもただ走るだけなら一番ですが、障害物競走みたいなのだといつもビリでした。

## 家族ぐるみのつきあい

小さい頃から家族ぐるみのつきあいが多かったですね。両親の親しい方が何人かおられたわけですが、石坂繁（元熊本

からかえって、ポジションなんかも自分たちだけでできるという自主性は養われたかもしれないですね。

## 知識を愛するのが

### フィロソファー

中学のとき、小林宇五郎という数学の先生がおられました。四年のとき担任していただいたのですが、その先生の知識を持つのは「フィロソフ」という言葉に感銘を受けました。高等師範を出ておられたのだけれど、自分自身も文理大をめざして非常に勉強されていました。校長の福田源蔵先生がこのような若いやる気のある先生を集めておられたんですね。それで先生方はただ教えるだけでなく、自分も勉強するという活気がありましたね。朝など寝ぼけまなこでこられる先生があったんだけど、まあ、ゆうべこの先生は勉強したんだなあと思って授業を受けていたという印象がありますね。子供は父親の後姿から学ぶといわれますが、生徒もやはり先生の後姿から学ぶのではないのでしょうか。

拍手事件というのがあったんですよ。朝礼のとき、何かの表彰式があり、校長先生から表彰を受ける者が賞状をもらうときに、他の生徒全員で拍手したんですね。ところが新任の配属将校が「気をつけの姿勢で手をたたくと何事だ」と、とてもすごい声で叱ったんですよ。これに